

保護者プログラム・1

『幼少期の子どもたちが自然体験をする
大切さについて』

日にち：2009年10月3日（土）

時間：13：30～14：30

会場：上味見生涯教育施設

講師：大石橋 節子

（森林インストラクター）

参加者：保護者12名

11年前と比べると遥かに体験活動が盛んになり、意識が高まってきているのを感じています。文科省で小学校の長期自然体験（基本5泊6日）をやっていますが、いきなり何も無いところから長期の体験をやると言われても戸惑うので、小さな頃から少しずつ体験を積み上げることで、自然な体験が出来るようになります。そのためにも、幼少期の自然体験が大切です。しかし、現実には、まだまだ活動できていないのが現状で、皆さんが出だしのスタート位置に立っているこの事がまずは大切なことです。

森体験の実情

なぜ小さな子どもたちに森の体験が必要なのかという事をテーマに上げてお話しします。今は、こうして皆さんに話をしている立場ですが、私はあくまで、森と皆さんの橋渡しの位置にいます。森の中で誰が先生かと言うと森そのもので、私達のような立場の者は、実はいてもいなくてもよい存在なのです。

今の小さな子どもたちの親御さん自身が、あまり自然体験をした事がないのが現状です。そのため、森と融合・共感してもらうきっかけをサポートし、そこから森や自然を身近に感じてもらうお手伝いをしたいと思っています。

実際には、親御さんが一緒になって活動をしていく中で、森と子どもたちの橋渡しをしていくのが理想です。しかし今の親御さんに自然体験をさせなかった世代が私の世代なのです。洗濯機、冷蔵庫、テレビ三種の家電製品に惑わされてしまい、自然体験を親に教えてもらいながらも、自分の子どもには、受け継いでいかなかった世代だと、その責任を痛感しています。

子どもたちに色々たずねると、「あれも知っている。これも知っている」と言うのですが、その「知っている」背景には直接体験は無く、本や雑誌・テレビなどで見ていることを、体験していると錯覚していることが大半です。時間がたてば忘れてしまうのは、感じていないからです。反面、直接体験をして感じたことは、体の中にずっと残って人生の財産となっていくのではないかと思います。間接体験よりも直接体験の方が、子ども

保護者講座・体験活動

の時は、より充実した知識として蓄えられると思います。

森は、私たちの先生

様々な感覚を全てフル稼働させてくれるのが自然の中です。まず森の中にふっと入る、そして見る。そのうち鳥の声が聞こえ、風が頬を伝わり、森の香りがする。目の前においしいそうな木苺があって食べてみる。そんなふうに森の中にいると、自然と五感が少しずつ湧き出てくる。それが、森が先生だということなのです。子どもたちは自然に、見て、聞いて、感じて、触って五感をフル稼働させています。森の中で五感を使うことで、より慎重に自分自身を守ることを感じる事が出来るのではないかと思います。日常生活でも磨かれた五感子どもたちの身を守ってくれます。秋には、どんぐりが沢山落ちてきます。子どもたちはどんぐりで沢山遊ぶと思いますが、探すということ、発見することで楽しさにも繋がります。前にテレビで、ゲームメーカーの方がいる子どもからの「僕はゲームを作る人になりたいのですが、どうしたらいいですか？」という問いに「ゲームばかりしていたら人のまねしか出来なくなるので、今のうちから外でどンドン遊んで、いろんなことをしなさい。」と言っていました。やはり外での遊びや体験は、色んなものに繋がっていくのだなと1人うなずいたことがあります。森の中では不思議なことや予期せぬこと、本当にいろんなことが起こります。それは段取りして出来ることではありません。不思議なことから色々な創造力を働かせることが出来ると思います。先ほど少し触れましたが、森の中では危険なことがたくさんあります。日常では、自動車が自分の身を守る対象になりますが、はっきりいって森の中では危ないことはもっと沢山あります。動植物から受ける危なさ、崖や石ころなどの危なさなど、想像以上のいろんなことがあります。森に入りすぐす中で、子どもたちは危険なことから自分の身を守るという事をまず覚えます。そのため、よほどのことが無い限り危険も自然体験の一つと考えて頂いた方がよいと思います。



活動の中で「ママは自分の身を守るのでいっぱい。あなたは自分で自分の身を守らないといけません。」という「はい」と頷いてくれます。森での体験を通して、危険から自分を守る術を身につけてもらいます。森の中は全てが先生なのです。

森の生き物から学ぶこと

森の中の生き物達から子どもたちは何を学ぶのでしょうか。最近の子はリサイクル、ゴミの分別などについてはしっかり教育されています。

森の中では、そのリサイクル活動が延々と続いています。植物・動物、そしてきのこがその関係にいます。きのこの本来の仕事は「分解すること」で、その点では、植物ときのこはしっかり分類されています。動物と一緒にあって森の不要物を分解してまた栄養素にする助けをしています。そして分解者の動物は植物に餌を貰い、住処を貰っています。このように、森の中の生物が多様であることは、互いに助け合って循環した生活をしていく上で大きな要素となります。このリサイクルや助け合いも人間社会にあると、とても循環のいい社会、生活環境を作ることができます。そうゆうことを子どもたちは、小さい時から自然体験を通して、必然的に学んでいくのではと思います。



森の案内人から見えてくること

森の中では、私は本当に案内人です。以前足羽山のどんぐりの森を子どもたちに案内しました。私から事前にこういう事をしてきてくださいと言ったのは、晴れでも雨でも全て長靴で対応してということと、長袖・長ズボン・帽子そしてタオルを持ってきてくださいという用意のことだけでした。タオルは汗拭き効果もあるし、虫除けにもなるし遊びの道具になるので、十分に活かして頂きたいと思います。

何をしたいか聞いたところ、倒木のココからココまでじゃんけんをして上手く渡れるかやってみようよ、という男子の子の提案がありました。前日の雨で、木の上はつるつると滑りやすく、みんな何回も落ちましたが誰も怪我をしませんでした。多少痛かったらうけけれどもやめる子はいません。次の遊びしようかと言うまでずっとやり続けていました。木の上を渡る体験で次の動作、自分でこうしたら大丈夫、滑らないように出来ると体でわかってきます。自分を守ってくれる小枝

をしっかりと掴んでいた女の子がいましたが、体験から自分で策が見えてくるのです。森の中は、子どもたちにいろいろな体験させることが出来ます。

登山用のザイルを枝にひっかけ、ござを敷き、ブランコを作りました。ブランコをして怪我をしてはいけないので特殊なザイルを使います。

この体験にきた子どもたちの年齢に差があり、上は6年生、下は4歳ぐらい。ブランコを調節する際に誰に合わすかということになりました。ある男の子が4歳の子を連れてきて「この子に合わせればいいよ。」と言うのです。これが子どもから来る突発的な優しさです。自然体験からうまれる一つのよさで、とても自然なことです。大人が色んなことを投げかけるよりも、子どもたちがふってきたことに頷き、助言し、サポートをする事が私の役目なので、一切投げかけることはありません。そうすることで、子どもたちは自分で発見し、色んなことを覚えていきます。

自然体験はいきる力という題目を掲げていますが、森はじっとしながらも、子どもたちに様々なことを教えています。

福井県の森は県土の75パーセントぐらいと言われています。日本国土だとあくまで目安ですが、60パーセントで世界に比べると多いほうです。しかし人口が多く、一人当たりになると1hの0.6パーセントとなります。杉は悪いと言う人もいますが美山は杉で有名になった場所です。森の形はひとつではありません。杉の人工林、擬似林の雑木林、そして国立指定公園のような天然林と、最低3パターンの森があります。

杉も私たちにとって大切な資源で育てば切れればよく、禿山にしないことが大切です。杉も一つの森として受け止めてください。

子どもたちは、幼少期、小学生の時代、それから中高生と成長していきます。一番自然を自然に受け止めてくれるのは幼少期の時期で、この時、土台が出来ていないとこれから難しい。例えば小学校のころ、幼少期に五感で受け止めていると、その五感で工夫しようとするため、より充実した自然体験が出来るのです。それが継続し中高生で自分なりの個性が出てきます。そのようにつなげていってほしいと思います。

家の中で子どもさんに、サポートしたり、助言したりすると思います。森のようになかなか子どもの様子をじっと見守るのは難しいですが、森の中ではなるべく、危ない、汚い、ダメダメ、早く来なさいは禁句にしています。あくまで予定は未定という事で、子ども達に合わせるのが私のプログラムです。



虫との関わり。

昆虫採集はいいこと？悪いこと？

「女の子は虫が嫌い」と思っているらしいんですが、実際には、動く物、音のなる物は男の子も、女の子も大好きです。小さな生き物を見ることで命の大切さも伝わると思います。

小さな動物も大きな動物も食うか食われるかの環境ですが、人間は人間を食べたりしません。動物の中では約束ごとがあり、それを知ることでも命をいただき、生かされていることを感じてくれると思います。保育園などでも「いただきます」をします。いただきますは、全部感謝の意味です。肉や野菜も全てもとをたどれば命です。命をいただきます、生かされていますという意味でいただきますと言う人もいます。人間も一緒です。人も命をいただき、生かされているということを自然の中で感じてくれるといいなと思っています。

この命の大切さという事をテーマとして、昆虫採集に対してどう思われているかが知りたいと思います。



保護者A: 採り、見て返すと言うのを家でやっているが、あまり分からない。反対ではないですが、やろうとは思いません。

保護者B: 昆虫採集や、植物採集の宿題は無くてもいいと思う。子どもが虫を捕まえて死んだ時、泣いたことがあるが、そういう経験はあっていいと思う。

保護者C: 私が虫を苦手で、子どもが虫を触っても出来ないの、子どもも苦手になりつつあり、それが心配。採ってきて飼いたいと言うが、育てられるのかと聞くと、無理だと言う。

保護者D: 無理にしなくてもいいと思う。なぜ命を落とすことが可哀想かと子どもから聞かれた時に、なぜお母さんはハエや蚊を殺すのと言われると矛盾となってしまい、どう説明していいのかわからない。この先、昆虫採集がしたいといえればチャレンジさせてもいいと思う。

保護者E: 色んな虫がいることを学ぶ事が出来るが、私は虫が苦手なため、採集はしません。

保護者F: よくしていた。6歳と4歳の子がいて、私としては捕まえることに問題なくその場で返していた。でも、彼らが飼うと言うことで、それなりの環境になる。毎年毎年繰り返しているのもそのうち学ぶのではないかなと思う。

保護者G: 私は虫を殺すのは反対です。

保護者H: 虫かごや網を与えたが、かごの中で虫が死んでいくのには抵抗がある。しかし私も昔はそうしていたので体験してほしいと思う。

保護者I: 子どもの頃に男の子の家には、カブトムシの箱が1箱はあったし、飼っていて思ったのがやっぱりかわいかった。毎年死んでしまい、その時は、ああ死んだな位で公園に捨てに行ったが、今考えると、毎年死んでいくことを受け入れられるようになった。蟻なども意識的に踏むことは無いし、こつこつ事も体験だと思う。子どもに対しては、飼うという事に対しては賛成。虫にとっては迷惑だが、子どもにとっては宝だと思う。標本は友達がやっていたが、見ていい気はしなかった。

保護者J: 男兄弟で、虫を飼うことに抵抗は無く、そういう中で体験していく物がある。しかしちゃんと世話をしないといけない、飼うだけではダメだと思う。

保護者K: 虫の事を調べたりするのに大事なことだと思うし、そこに意味があればいいと思ったが、自分でこじつけただけの意見ではだめだと思うし、よく分からない。

今、みなさんに答えを聞きましたが、答えは無いです。虫博士の先生達は何千匹と殺していると思います。何を伝えたいかと言うと、例えば虫を採って、殺して、死んで、その状況は必然的にある。だから虫とりに関わる子は「同じ種類でなくさまざまな種類と出会って」と助言します。例えばトノサマバッタを10匹、20匹集めても意味が無く、数を自慢する方向に言ってしまおう。トノサマバッタ、ショウリョウバッタ、オンブバッタと出会っていきましようと言う様に子どもたちには助言をしています。必ずかごの中で死んでいきます。人間は一人ひとりに大変希少価値がある、だから虫の命に希少価値が無いと言うのではなく、そういう事に対応するために沢山生みます。そう言った事で虫と関われるので、私は虫とりに沢山の体験を重ねて頂ければいいと思います。ただ死ぬということで、保護者さんは目をそらしてしまっていますが、虫に関わることで森の環境もよく知ってもらえます。命は粗末にはしてはいけないが、虫の観察をするという事は命の大事さを知ってもらえるとてもいい機会だとも思っています。それぞれの感性で子どもたちをサポートしていければいいと思います。



保護者プログラム・2

日にち：2009年12月5日（土）

会場：福井市上味見生涯教育施設

第1部

講演・座談会『日常生活と自然と子どもたち』

（11：00～12：30）

第2部

体験会『焚き火と森の落し物でクラフト』

（12：30～16：00）

講師：大石橋 節子（森林インストラクター）

参加者：保護者12名

第1部『日常生活と自然と子どもたち』

それぞれのかかわり方

日常の生活で、子どもと身近な自然とどのように関わりをもって生活しているのか、保護者さんに振り返ってもらいました。

■平日は、学校や塾・スポ少などで、子どもも忙しいため、やることさせ終えれば、ゲームや読書・工作などをゆっくり楽しめるようにしている。休日には、公園等にでかけ、体を動かす時間をできるだけとるようにしている。子どもに体験してほしい自然や友達との遊び、なかなか家庭では出来ないことは、このような教室に参加してやるようにしている。

■日常生活で自然と関わることは難しい。家の前が川で、カニが多く、家の庭にくるので、子どもがみつけてつかまえて遊んでいる。散歩で川や公園に行く時は、おちている物を見て、集めて遊ぶことが多い。自分の子どもの頃と比べると、自然にふれあうことが少ない。昔はもっと環境がよく、自由な時間があった。

■外で遊ぶ時は、好きなように遊ばせている。家の中では、あれして、これして、そんな事駄目とい



っている。それでも言うことを聞かないので、怒っていることが多い。本人は絵を描くことが好きで、家にいるときは、絵をよく描いている。

■毎日時間におわれ、ゆっくりすごすことがあ

まりないように思えるので、時々、山に登ったり動物とふれあったりと時間を気にせず子どもたちもやりたいことを出来る時間を作るようにしている。しかし、里山にも行きたいと思っても、所有者の許可なく立ち入ってもいいものか、農薬が散布されていないかなど心配も多く、子どもの希望にそえないことが多い。そのため、いろいろな団体のお世話になっている。家の近くには、自然環境があるとは言いつらいものの、自転車で5分くらいのところ、公園があり、子どもたちともよくいっている。それでも、自然や植物よりも遊具で遊んでいることが多く残念である。

■家の前の神社でマツボックリをとったり、公園でどんぐりをとったり、バッタを捕まえたりしている。夏は、川の近くで、バーベキューをして川遊びをする。



■子どもに対して、自分の都合のよい管理を

し、自分の基準で判断し、決めつけ子どもの考えることに対し、あまり理解していない自分がいる。悪いことと思ってもなかなか直すことができない。

■日常生活の中では、子どもに指示することが多く、思うように動いてくれないとこちらもイライラするし、子どももますます反発して動かない状況になりがち。最近は寒くなっていて、帰ってくると「テレビ」になっていて、その様子を見るとまた怒って指示してしまう。自然と関わるのは、自分も好きだし、休日はできるだけ子どもとでかけるようにしている。自然や体験のイベントに参加し、自由にさせている。家でも、庭などで、土と関わるように畑などをしている。まだ親が連れて行っているという感じで自発的ではない。

■公園にいて、どんぐりや木の葉や花と接して遊び、散歩の時に、道端の雑草をとって遊んでいる。土日は主人の実家に行って、畑や田んぼにいる虫を観察し、草木で遊んでいる。焚き火もできるので、火の番をしながら、興味深く見入っている。火と接することは少なくなっている、大切な体験だと思う。

■家の近くに神社があるが、外で遊ぶことが少なく、空き箱で工作やブロック遊び、読書がほとんど。日常生活では時間に間に合うようにと「早く」とせかしがち。私が子どもの頃に「どうして大人は急ぐのだろう？」と思っていたことをしているのではないかと反省ばかり。思い

っきりのびのび育てほしいと思う一方、いろいろな事にかまはずぎと思う。

■日常は早くしなさいが口癖で、子どもをせかしている。反省はするがやめられない。平日は、登下校の遊歩道で自然とふれあうくらい。葉っぱを拾って玄関に飾ったり。休日は対照的に、自然の中へ行きたいので、親子で行く。森に行くと、口はチャックで子どもの好きなようにしている。自分は自分で楽しみたいということもあるし、子どもも私から離れてたくましい感じ。

■家の回りには、草や木、畑などがあり、晴れていれば、虫を探してつかまえ、畑の土の中の生き物を探して遊んでいる。近くに山はあるが、親がどう導いてやればよいのか、わからない。春・夏は生き物が沢山入った虫かごが玄関にならぶ。



これからかわりたい自然

- のんびりとできる自然。
- 危険すぎない場所。
- 子どもだけでも行ける場所。
- 川遊びができる場所。
- 安全で安心できる環境。
- 可能ならば、森のようちえんのようなここからここまでなら自由にしてもいいというような場所がほしい。
- 山登り。里山での植物や昆虫との関わり。昔ながらの季節と共にある手仕事。
- 身近にある里山は人の手があまり入っていないので、親子で安心して入っていけるような気軽に行ける場所が増えるといい。
- 気軽に行ける森マップがあるといい。



第2部

『焚き火と森の落し物でクラフト』

→活動の様子は、P7の第2回体験活動のページをご覧ください。



- * 工作は思わず夢中になり、楽しかった。マシュマロや焼き芋の味が別格で、火の力を感じた。
- * 講師の方や他の保護者さんの話に共感したりアドバイスをもらったり、とても良かった。
- * 子どもと一緒に森にいき、初めて冬いちごを食べた。毎日同じようにすごしているが、今日は一日心がリフレッシュでき楽しかった。
- * いろいろな話を聞いて参考になった。子どもと一緒に長い時間工作ができ、子どもの発想力にびっくりした。
- * どんぐりネックレスをもらえて嬉しかったよ。
- * なかなかじっくりゆっくり過ごすことが少ないので、今日は楽しめた。特に工作は家でもやるが、材料が違って子どもも楽しんでた。
- * 火の燃やし方やさつまいもの焼き方などを教えてもらい楽しかった。いつもあわただしく一日が過ぎていくので、ゆっくりとした時間を子どもと過ごし、一緒に楽しめてうれしかった。



保護者プログラム・3

日にち：2010年1月31日（日）

会 場：上味見生涯教育施設

講 師：大石橋 節子
（森林インストラクター）

参加者：保護者 12名

3回の活動を終えて

3回の活動が終わり、子どもたちの様子がどうだったのかを保護者さんにふりかえってもらいました。

- 心の変化として、外にでると親から離れて行動したが、親がいると邪魔みたい。家に入るととても甘えん坊になった。特に夜がべたべたしてくる。
- 今回これで終わることをとても残念がっていた。子どもだけでなく、親の私もいろいろと話を聞けるチャンスがあったのが、よかった。
- お泊りの後、迎えにいった「楽しかった？」と聞くと、はっきりした答えが聞けなかったが、その後、ぼつりぼつりと自分から話をしてくれるようになった。雪の結晶を自分の手の中で見たことや、あぶり出しの絵を描いたことなど。内気な性格なので、なれない環境で遊べたのか、楽しめたのか心配だったが、何か心に残ることがあったようで、安心した。目に見えて何か変わったということもないが、よい体験になったと思う。
- 親も一緒に体験できる活動で、楽しめた。
- このような活動があれば、できれば参加したいと思う。子どもが行きたいといってくれたらいいなと思う。
- この活動を始まる前から楽しみにしていた。

前日は「明日が楽しみ」と布団に入り、活動が終わって家に帰り寝る時も、話しがつきない様子。お泊りも自分から準備をするものをしてきて、積極的な様子が見られた。



- 新しいことをする時、一歩さがって行動を躊躇する子どもでした。この活動に参加して、少し前向きになったように思う。
- 活動的で、どんどん人前に行く子だと思っていたが、案外消極的な面もあるということがわかった。妹をよくかわいがる子になったと思う。
- お泊りが楽しかったよう。なかなかこんなにたっぴりと自然体験ができないので、自然と触れ合えて、めいっばい遊べてよかった。ぼつりぼつりと楽しかった思い出をはなしてくれる。雪灯籠がかなり印象に残っているよう。最近では外で遊ぶ時間が長くなっているよう。お友達ができて、帰りに名前を覚えてもらっている姿が見られて、とてもうれしかった。
- 宿泊して帰ってきたとき、とても落ち着いていた。その日は、暗くなるまで、そのまま校庭で遊んでいた。



- 明らかにかわったというのはわからないが、ここで体験したことには、自信満々。身支度が大好きになりました。身支度をすると、外で雪が待っている！ワクワクという感じ。とにかくとても楽しかったようで、体いっぱい遊べたし、神秘的な感覚も受けて帰ってきてくれた。
- 親の知らないところで、自分で考えて行動できるようになった気がする。
- 自分で考えて行動したり、周りの様子を見て声をかけあったり、成長していると思う。
- 迎えに行った時、最後まで、雪遊びの跡をいろいろ説明してくれた。少し甘えているようにも思う。夜は必ずお父さんとお母さんの間で寝るといって寝ている。
- 今日、森の中を一緒に歩いた時に、「お母さん大丈夫？」と聞いてくれたり、最後にはかんじきを持って歩いてくれたり、平気で雪の中を歩く姿を見て、逆に心配してもらい、頼もしく感じた。自分は経験しているという自信を感じた。そして、親が手を出すことをできるだけ控えようとするよう

になった。自分で考えてやらせるように思っている。

- 自由な活動の大切さを感じた。子どもが参加したいと言えば参加させてやりたいし、参加してほしい。
- 朝一番で寂しくて少し泣いたと言っていたが、もっと泣いているかと思ったので、結構強くなったかなと思った。
- 前よりも少しは自分から働くようになり、今後も体験したいと言っているので、少しずつだが、前向きに進んでいってくれたらと思う。
- 迎えに行った時、笑顔でやったこと、やれたことの報告があり、帰ってからもはなしが続き、初めての体験を自慢しながらはなしてくれた。
- 親から離れて泊まったの活動プラス自然での体験はかなりよい刺激になったようで、できないことへのチャレンジを今までよりも普通の生活でも自分からとりくめるようになったように思う。自然との関わりは今後も続けていきたいと思った。
- 子どもの可能性や何気ない一言に気づく機会がすくなく、今回の体験は私の方がすごく勉強になった。



地球上で生きている人類はどうなっていくのかなと思いを巡らせ始めました。ほんとです。

- ◆ 自然に対する思いが変わり、考えさせられた。
- ◆ もっと自然の力を得て、子どもと一緒に成長していきたいとなりました。
- ◆ 日頃から自然体験活動をさせたいと思い探している。同じような思いを持った保護者の方のお話が聞けたり、どういった活動を家族でしているか聞いて良かった。

B、今度どういった研修会・体験会を希望するか

- ◆ また同じような感じのもので、春や夏にも開かれるもの。
- ◆ 私自身もどう自然と触れ合うのか、子どもにどう教えればいいのか分かっていないので、親も一緒に楽しめる体験があれば良いなと思いました。
- ◆ 行って帰ってくるだけではなく、明日へつながるような会。（我が家もこれっきりではなく、子どもの体験した記憶がずっと続くように過ごして行きます。）
- ◆ 川遊びや作物収穫等の体験会。
- ◆ 田舎暮らしの体験、季節の農仕事の体験（親子で）、便利なものを省いたサバイバル体験。

研修会について

A、研修会に参加して、具体的に得られたこと

- ◆ 外で遊ぶ楽しさが感じられた。焚火でイモやマッシュマロを焼いて食べたのがとてもおいしく、焚火の火の温かさで外の寒さを忘れるほどだった。
- ◆ 分かってはいましたが、自然と触れ合う事は大切なんだと改めて感じ、つつい面倒くさくなりますが、その思いをぐっところえ、これからも外にでかけてみようと思います。
- ◆ 昆虫一匹つかまえるにしても人それぞれ色々な思いがあること、勉強になりました。
- ◆ 子どもは宇宙人という発言になるほどと思った。親が「危ないからダメ！」ばかり言っているのは子どもの可能性は伸びないと思った。個性、子どもの長所をもっと伸ばしてあげたい。
- ◆ 「森」というものについて初めて意識しました。



指導者研修会

第1回指導者研修会

森で秋を感じましょう

日 時：2009年9月26日（土）
 場 所：上味見生涯教育施設・キャンプ場・ツリーハウスの森
 講 師：大石橋 節子、辻 一憲
 内 容：午前）自然体験活動（ネイチャーゲーム）
 午後）安全管理講習（心肺蘇生法とAED）

第1部）テーマ「森で秋を感じましょう」

■活動の内容

「森のお話、あなたと森の関わりを伝えましょう」

それぞれの森との関わり方や森への思い、今後どう森と関わっていききたいか。

「幼少期の子どもたちへの伝え方」

- ・ハブニングは逃さない。
- ・葉っぱや木の名前は知らない。
- ・森の温度
- ・ひつつき虫
- ・虫は偏食？
- ・くるんとした葉っぱ
- ・秋は何から感じる？

「危険箇所発見」

- ・スズメバチ
- ・ウルシ
- ・長靴
- ・アレルギー
- ・危険箇所を取り入れること

「森の中で助け合える立役者」動物ネイチャーゲームの体験

- ・わたしはだれでしょう
- ・テントウムシとであってみましょう
- ・カモフラージュ

「森をつくる立役者」植物ネイチャーゲームの体験

- ・フィールドビンゴゲーム
- ・かさね言葉で森の中を表現しましょう
- ・秋風によっていくタネ

「体験からのわかちあい」ふりかえり

幼少期の子どもたちへの伝え方

- 五感を使えるプログラム内容がよい。
- 格好・服装の確認。帽子は必ずかぶらせること。長袖・長ズボン。長靴（森の中では、機能的。晴れ・雨関係ない）安心でき、子どもにもよい。
- 子どもに自分を見てもらふ工夫をする。とっぴょうしのないことをしたり、虫やお花を体や名札などにつけたり。
- 仕掛けをしながら下見をすること。状況はいつも違ってくる。危険の回避にもよい。
- ぎゅうぎゅうのプログラムはだめ。余裕をもたせること。指導者からの投げかけだけでなく、子どもからの投げかけも取り入れる。ピンポン状態。
- 四季を感じてもらふ。自分の中でも、情報を膨らます。
- 目線、目のパワーを使う。何かを探すと必死に目をこらす。いろんな状況を膨らます。



- 言葉、表現の仕方。子どもにあわせた言葉を使う。
- 子どもにわ taishou やすく伝える。
- 子どもの投げかけを大事にする。

⑩大人と子どもの活動

- 今の大人も子どもも視線は一緒。幼少期の保護者世代の大人も体験してきていない。そのため、大人と子どもをわけて考える必要はあまりない。同じレベルだと考えていい。ただし、子どもと大人はできるだけわけて活動を展開した方がよい。別にするだけで、保護者に頼りきることもなく、子どもの元気を見ることが出来る。
- 離れない子は、無理して離さなくてもいい。
- 親と一緒にだと、親は、小さな石ころさえも危ないとよけさせてしまう。→転んでもいい。転ぶことで、歩き方を学び、気をつけるすべを体で覚えることができる。
- よけたところしか歩かせないと、危険を体験することもできないし、危険を回避する能力も備わらなくなってしまう。

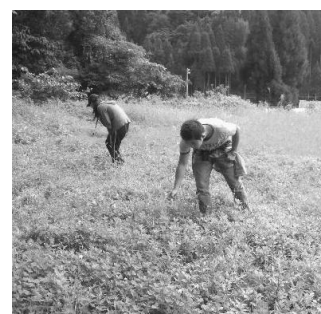
⑪あるものをあるものとして認める。

- 豊田三郎画伯。あるものを否定せず、あるがままを描く。
- 森には様々なものがある。たとえば、「人間が作った森」「自然が作った森」「動物が作った森」など。いくつもの森があるということ子どもたちに伝えていくことが大事。
- 人間が作った森は、その木々は、町のお家を作る。「町の森」になっていく。
- 存在する森を伝えていってあげる。人間が作った森だとしても、その森のよさも十分認めていき、ある森全てを受け入れていくことがよい。スギの森のよさもある。

第2部) 安全管理講習

救急医療の先進国、アメリカで25年以上も前に誕生した一般市民レベルの応急救護の手当の訓練プログラム。

MFA(メディック・ファースト・エイド)の心肺蘇生法とAEDについて講習、実習を行った。



～参加者ふりかえり～

- 先の指導者を見据えて、幼少期をイメージして、研修会を行った。ネイチャーゲームは、普段の体験では、1時間ほどなので、今回はいろいろと体験できてよかった。
- 今回行ったネイチャーゲームは基本なので、自分の中でやりやすいように変えていったらよいのでは。感じたことそのままを伝えた方が、子どもにも伝わりやすい。
- ネイチャーゲームは、自分でも気づかないことや、子どもにやったらおもしろそうなこともあったので、参考にしていきたい。
- MFAは今までで、1番本格的な安全管理の講習だった。復習して使っていきたい。
- MFAの講座を受けるとAEDの使用許可ができる。復習のよい機会になった。
- 午前中の活動では、具体的なことがわかった。子ども側にたてたことで、わかったことが多々あった。
- どんな小道具があって、それがどう一連の流れで出来ていくのか、体験しないとわからない。
- 安全管理は受けるたびに、何かしら新しいことをわかっていい。
- 森の種類があり、杉林も自然に受け入れられるようにしていきたい。
- 今回を子どもの活動にも関わる1つの機会にしたい。
- 公園は公園ならではのよさがあることもわかった。
- 子どもは、これからの人材になっていくことを強く感じた。

日時：2009年11月13日（金）9：30～14：00
 場所：岡保保育園、周辺山（でかでか山）
 講師：岡保保育園職員
 内容：9：30～11：30

- ・でかでか山での子どもたちの様子を見、共に体験する。
- ・指導者の子どもへの接し方を見る。学ぶ。

12：00～12：30 園児たちと昼食

12：30～14：00 園長先生のお話をうかがう

第2回指導者研修会

里山保育の実践 岡保保育園での 実地研修



でかでか山での子どもたち

まずは、園の門の前に集合。お友達と手をつないで、元気よく出発！これから行くでかでか山のお話をしたり、行く道々に咲く花やねこじゃらしを摘みながら歩いていく。森までの道のりは、なかなかおもしろい。人が一人壁にぴったりくっついてやっと通れる道を進んだり、小学校の体育館裏の階段とスロープを走って通ったり。くねっと曲がった階段は子どもたちにとっては、森へ続く不思議な回廊のよう。満面の笑みで走り抜ける。次に出てきたのが、小学校のプールと田んぼにはさまれた細いあぜ道。足一本しか入れないくらいのコンクリートの畦だ。そこを『一本橋をわたるぞ』と一列になって進む。そろり、そろりと渡る子が入れば、たたた～と走っていく子もいる。ただ歩いて森へ行くだけじゃない。

子どもたちの冒険は、園を出た瞬間から始まっていたのだ。そして子どもたちのわくわくを倍増させる先生のユニークな導き方はとても自然体だった。

森に到着すると、「森の神様、おじゃましま～す」と元気にごあいさつをして、自分の興味のある方向に走り出し、夢中になって遊んでいる。一人として、何もしない子がいない。一人であろうと、友達と一緒にであろうと、とにかくいろんなことをして遊んでいるのだ。



～でかでか山でくり広げられた遊び～

- 枝を集めてクリスマスツリー作り
- 動くものに興味→サワガニさがし
- 丸太をよじのぼって、じゃんぷ！
- 沢にかかる丸太の橋渡り。橋の上で飛び跳ねる。
- よじ上った丸太から幹からもいだ皮を「雨だ～」とふらせる。
- 貝（タニシ）探し。タニシのお家作り
- くぼみにできた水溜りに葉っぱの船を浮かばせて、港ごっこ。
- 白い石を見つけると、「宝石だ！」と宝石箱作りが始まる。
- できたクリスマスツリーで、サンタさんをお願いしようと葉っぱの裏にお手紙を書く。アオキの葉っぱ。それをツリーに飾る。
- カニに水をくんできてあげようと、手ですくう。こぼれてしまうので、ササのコップで水運びが始まる。

先生たちは、ニコニコしながら、子どもたちをそっと見守り、大きな声もけっして出さない。まるで森の一部のよう。

森におじゃまさせてもらうということ・・・

森は生き物の場所であり、そこに人が入らせてもらっている。だから森に入る前には、子どもたちは、「山の中に入れてください」と大きな声でお願いをする。これは、クマ対策の一環を担ってもある。自分たちは、遊ばせてもらっているという感覚はとても大切。そして、子どもに自然への畏敬の念をもってもらうこともあわせて大事なことだ。園の子どもたちは、ここは動物の森だと感じている。



少しの危険はあるけれど・・・

森の中は決して安全な遊び場ではない。倒木もあるし、石ころもごろごろしているし、地面だってでこぼこだ。しかし、危険体験も大切な要素。子どもが自分で選んで自分で判断して、遊んでいる。ななめにそびえた倒木の先っぽからびよんと飛び降りたりする。丸太の橋をよろよろしながら渡ったりする。こうやって、子どもたちは危険から回避する方法を自然に身につけている。

どうしたって怪我がつきもの。だから怪我をしたらすぐ病院へいくということ徹底してやっている。保護者とも信頼関係ができているため、怪我をしても文句を言う人もいない。その背景には、「怪我をしても楽しい」と子どもが親に伝えていることが大きく、「明日は里山に行くんだ！」と生き生きとした顔を保護者に子どもが見せている。その顔を見ると、怪我をすることも帳消しになってしまうよう。嬉々として森遊びの話をしているのだそうだ。



大人たちの子どもたちへの接し方・・・

スタッフもとにかく楽しんで行っている。保育士は、子どもたちが何をするのかのぞかせてもらいながら、安全管理をしている。森に連れて行くと、まずは、子どもたちに体験をさせる。到着すると、子どもは、何を言われなくても、すぐに飛び散って思い思いに遊ぶ。森の中では、先生はだまって見守っている。「そうしたか！」と一呼吸おいた後で、動き出す。大人が最初から何でもかんでも言わない。そして、ちょこっとの中に知恵を膨らましてあげる。そうすると遊びから徐々にまわりを理解するようになってくる。

ここでは、先生たちはよく動かし、臨機応変な動きができる人ばかりで、表情も自然体。自然に溶け込み、笑顔も自然。先生のフォローのエネルギーがすごい。



保育園が目指すもの→待つ保育そして自主性を発揮する保育

家では、「待つ」ということがなかなかできない。そのため、「先生ほど、待ってられない」と保護者さんから言われる。「待つ保育」をすることで、「子どもは自分から動き出す」ということを学べる。

保育園では、毎日、園から遊びを提供していない。子どもたちは、毎日、自分で遊びを生み出し、友達を作らないといけない。これはとても大変な労力がある。自由遊びは、自由、自由といっても、実は大変なこと。子どもにとっては指示されたことをやることの方が、とても楽なことなのだ。



第3回指導者研修会

実際の事例から 幼少期の活動を 考える

日 時：2009年12月12日（土）

場 所：上味見生涯教育施設

講 師：萩原 茂男（NPO法人 森林楽校・森んこ 代表）
村上 忠明（NPO法人 KIDS 'AU）

内 容：午前）名田庄での活動事例から指導者のあり方を学ぶ
午後）今後の幼少期の活動について話し合う

原点となる活動。保育園ではじめての自然体験

長男が通っていた保育園の保護者会の役員になった時、園から親子を対象にした自然体験のプログラムをやってくれるように頼まれ、親子おおよそ160名の参加者を対象に実施した。自分で作った名田庄の「自然探検MAP」を使いながら散策し、途中で、自然の遊びやゲームを取り入れた活動を行う。これが好評のうちに終わり、参加した先生に、今度は子どもたちだけで、何かやってほしいと頼まれる。そうして3ヵ月後に年長クラスで、一時間半の時間を任せられ、保育園に向かった。最初に、動物カードを子どもたちに見せ、何の動物かあててもらおうゲームを行う。



子どもたちは、思った以上にいろいろな動物を知っていて、次々と動物をあてていく。とてもよく知っているのので、どこで知ったのかたずねると、テレビや絵本で見たという子もいれば、実際に名田庄で見たことがあると言う子もいた。

その後、「木のジェスチャー」というゲームを行う。園庭に生える木の格好を、体全部を使ってまねっこをする遊びだ。腕や頭で枝をあらわす。子どもたちは、最初はとうとうことかわからないようだったが、ゲームのやりかたを理解すると、園庭に生える木々の形を次々と真似しだす。それはとても的確で、本当に上手にまねをする。子どもたちの姿をみると、一体どの木をまねしているのかということが、とてもわかる。生き生きと木になりきる子どもたちの姿を見て、「なんてすごい感性なんだ。」と感動する。そのうち、みんなで一本の大きな木を作ってみようとなる。一人の子を肩車すると、他の子どもたちが、その幹の周りに集まり、枝となる。そんな中、ひとりだけ、枝にならずに寝転んでいる子がいるので、「はやく、枝になりなよ。」という、その子は、「根っこやー」と返す。この時の体を駆け抜けた感動は今でも忘れない。どうして根っこなんて思いつくのか！まさにこの時の体験が今の自分の原点となっている。根っこや〜の合図で、他の子どもたちも次々と根っこになる。先生は、「子どもたちの目の色がいつもと全然違う。生き生きしていた。こんな姿をみたのは、はじめて。」と感嘆してくれる。根っこになった子どもとは、今でもかかわりを持ち、町で会えば、声をかけよってくる。そこから年に2〜4回、保育園で自然体験活動を実施することになる。保育園とかかわりを持つことで、更に地域と付き合えるようになる。

遊び場所についた時に、その場所の危険についてレクチャーをする。ロープを張って、「ロープから先は危ないので、絶対に行かないでください」と言う。「はーい！」と元気な返事をしてくれても、「じゃあ遊んでいいよ」というと、決まって危ない方に行く。ロープの先が興味津々で、ぎりぎりまでいったり、おもしろがってのぞいたりする。こっちからこっちは危険と大人が区切り、ラインをひいてしまうと、その危ない際まで、子どもたちが行ってしまふ。これは本当の怖さがわからないから。子ども自らに危険を判断させることの方が大事だし、その方がかえって安全なのだ。危険のラインは引かずに、教える。「あっちは崖になっていて、おっこちると怪我をするよ。怪我をしたら、病院にいかなくちゃいけないし、遊ぶこともできなくなっちゃう」と言う。そうすると、子どもたちはちょっとのぞくだけで、もう近寄らない。自分でどんなに危ないところなのか見て。危険だなと思うとわざわざ行かない。危険を体験し、知って、察知できることが大事。ラインを引かない分、大人は見守っていないといけなく、大変な面ももちろんある。

自分をもつ

今の親たちは、自分たちが経験・体験したことのないことを子どもたちに、学ばせようとしているが、自分がやったことのないことをやらせても、会話は、はずまない。自分がやってきたことを習わすと、親の威厳も保たれ、会話も生まれて、良い親子関係が生まれる。自分の得意分野を伝えることで、尊敬され、子どもの大先生にもなれる。親子でネイチャークラブをすると、子どもは、親の新たな面を発見することができる場面がある。特に父親は引き出しをたくさん持っているのに、なかなか出せていない。人間同士でつきあうことの出来る自然体験では、出せることが多い。

大人も子どもも一緒の人間

どうしたらわかってくれるかな？と子どもの目線で考えると全部いける。大人でも、「～しなさい」は強制。これは子どもだけでなく、大人でもしたくなくなる言葉。子どもを楽しく充実させ、個性を出させるのができれば、大人でも全部いける。ここがうまくいけば応用も効く。



森の幼少期自然体験教室を終えて

森林インストラクター
大石橋 節子

今回の活動の特徴は、同じ参加者（幼少期）と共に同じ森で秋から積雪の冬をすごしたことでした。『秋』と一区切りしましたが、前半の3回では紅葉していく森、実が落ち、そして葉が落ちていくという様々な秋を体験しました。子どもたちは、変貌していく森を見てすごし、そして感じて、子どもらしさを優先して活動していたようです。五十代半ばをすぎた私はその様子を見た時、とても懐かしく自分の幼少期時代が次から次へとよみがえっていきました。

私たちサポートする立場は、子どもの自由（原始的）な行動を優先する『子どもの自由な展開』をテーマにし、背景にざっくりとした予定を思い描き、子どもにはノンプログラムで対応しました。

子どもたちは、この森でどのような事を伝えてくるのか、私たちもときどき・ワクワク状態で、森の樹木のように見つめさせてもらいました。特に、雑木林と雪、青い空、そして凍てつく寒い風の季節には、言葉表現では限界を感じさせる多くの感動と手ごたえを得ました。この季節の条件（雪の冷たさ、冬の寒さ）に負けずに、元気に雪と寒さと共に遊べることをイメージして、それとなく子どもたちを誘ってみました。子どもたちが自分でも出来る寒さ対策となる身支度は、とても面倒なことです。防寒着、手袋、長靴、足ぼそ、帽子などを身に着けるという、まず『自分が環境に合わせる』ということ伝えました。あえて面倒なことに意識を持ってもらう、このことがとても大切だということ、学んでもらえた実感しています。

真っ青な空に見つめられ、銀世界の雪の環境に子どもたちは思いのままに飛び跳ねていきました。まるで、森の中のうさぎとりすが飛びまわっているようでした。

日常生活では、全てのことが人間主体で、寒ければ暖房部屋でゲームをしてすごすといった、狭い領域の中で、子どもらしさを発揮できるのだろうかかと疑問に思っていました。今回の体験で納得させられ、自然環境こそが、子どもらしさを大いに発揮できる場所だと実感しました。森の体験を多くの子どもたちに投げかけたいと更に思いを強くいたしました。

積雪しているからこそ歩ける雑木林の中で、活動しました。小さなサバイバル、動物の痕跡や気配、足跡追跡の静寂間、様々な森の環境（人工の森、ドングリの森、竹やぶの森）、足跡をたどることでこの森で動物たちが何をしていたのか、それぞれが思いを伝え合っていました。

思い描いてください。「森の中で様々な生き物の一つとして、子どもたちは共存しているのです。うさぎやリスや野鳥、そして小さな子どもたち、森の中の風景です」。この体験では、森の動物の視点で森の様子を思い描いていたと思います。サバイバル的なことでは、私たちの根底に「絶対にケガをさせない」事を思い、あえて大丈夫かなと思うことを体験してみました。小さなかわいい笑顔が消えて、緊張感と不安の表情に変わり、ひとりひとりクリアして、チャレンジしている仲間に「頑張れ」と声をかける思いやり感が、どの子にも見られました。この活動では、最終回の時に子どもたちに、親を森の中に案内してもらいましたが、それぞれの親の腰がひけている状態に「大丈夫かな～」と不安な表情いっぱい、そんな子どもたちには、たのもしささえ感じました。私たち大人は、ありのまま捉え、自由な発想で展開していくことが、とても刺激になったと同時に、子どもらしい行動を目の当たりにしました。

大人世代にとっても、受け止め方は様々だと思いますが、五十代・六十代の方々は、ご自分の昭和時代の子ども時代の経験こそを、現代の子どもたちに投げかけると良いと思います。

子どもは子どもらしさを優先して成長し、その中から必然的に社会性も身に付けていけることが理想です。今回の活動のストーリー（四季の移りかわり）を背景に、シリーズで展開していくことの重要性を再確認しました。親や周りの大人たちが伝えられないことを森は体験によって伝えてくれます。

小さなことを1つ1つ体験し、学び、全ての子どもたちが 幸せになれることを祈りながら、私はこの活動を継続していきたいと思っています。

